

## 書評 新刊 紹介



水産学シリーズ 113 日本水産学会監修  
能登谷 正浩編 有用海藻のバイオテクノロジー  
定価2500円+税, 恒星社厚生閣刊 141頁

本書は、日本水産学会のシンポジウムで講演された内容をまとめられ刊行された。

有用海藻のバイオテクノロジー分野は、今までアマノリ類やコンブ科植物に関する細胞融合・カルスの研究が多く報告されてきた。バイオテクノロジーは、もっと幅広い定義であり、海藻養殖技術はバイオテクノロジーと思っていたが、本書の目次を開くと広い研究分野の項目が並べられており興味が増した。本書に報告されているものを列記する。

1. 組織培養: コンブ類-能登谷正浩; ホンダワラ類-木村創・能登谷正浩; アミジグサ類-能登谷正浩・金 亭根, 紅藻類-黄 偉・藤田雄二; 緑藻類と植物生長調節物質-天野秀臣

2. アマノリ類の育種: プロトプラスト単離技術-荒木利芳; 細胞培養と細胞雑種藻体-藤田雄二・山下亜純; プロトプラスト再生藻体の選抜育種-増田恵一・谷田圭亮・水田 章; DNAによる品種識別-岡内正典, 凍結保存-藤吉栄次
3. 有用物質の探査および利用: 生理活性物質-梶原忠彦; 紫外線吸収物質-前川行幸

組織培養の研究は、20年くらい前より海藻学の新しい研究分野として、多くの研究者が参画したが、技術的開拓はほぼ終り、有用海藻の人工増殖への応用研究に入ったという情報が本書で得られた。海藻の細胞融合やDNA分析研究の最近の動向も短い頁数にもかかわらず、多くの情報が提供されている。

海藻の生物学分野の研究者には、少しなじみが薄い植物生長調節物質、生理活性物質、紫外線吸収物質の項も理解しやすく書かれており、興味深く読むことができた。それぞれの報告は、理解しやすく短く書かれており専門的な知識がなくともどこからでも読めるので、生徒にトピックを提供せねばならない教育に携わっている方、海藻養殖に携わっている方、海藻加工会社の開発部門の方にもぜひ読んで戴きたく紹介する次第である。

大野正夫 (高知大学海洋生物教育研究センター)

Taxonomy of Economic Seaweeds, with reference to some Pacific species. Volume VI. Isabella A. Abbott, Editor. xviii + 212 pp. California Sea Grant College System, University of California, La Jolla, California. Report No. T-040. August 1997. ISBN 1-888691-04-02. (\$15)

1984年から行われている有用海藻の分類学に関する国際ワークショップも回を重ね、これまでその成果をまとめた単行本が5冊出ていたが、今回6巻目が発行された。1995年7月にマレーシアのクアラルンプールで行われたワークショップの成果をまとめたものである。対象とされた海藻は、ホンダワラ属、テングサ目、オゴノリ属、イバラノリ属で、中国、香港、台湾、ベトナム、タイ、マレーシア、オーストラリア、アメリカ、チリ、日本から17名の研究者が集まった。

ワークショップ開催と成果をまとめた本の出版にはCalifornia Sea Grant College Systemから補助金が出ている。ホンダワラ属やオゴノリ属などの有用海藻には分類学的に難しいグループが多く、分類学的研究を進め

ることは有用種を見分けるために産業上重要であり、また、成果も期待される。

ワークショップでは、ホンダワラグループ、テングサグループなどのグループに分かれ、それぞれ持ち寄った標本を基に分類学的議論を行う。分類学的研究は主に国内の標本で行われることも多いので、このようなワークショップで得られる成果は大きいだろう。日本でA種としていたものと中国でB種としていたものが同種であるとわかることもあるわけである。

今回出版された6巻目は、これまでと同じように論文集の体裁で、対象グループ毎に節としてまとめられている。どの論文も記載文・図が豊富で同定の際には大変役に立つ。新種や新組み合わせの発表もされていて、これらは確かにワークショップの成果ではあるが、新分類群の発表はこのような単行本ではなく、審査員制度のある学術雑誌で行うべきであるという批判もある。しかしながら、この第6巻も、海藻の分類学を専攻している方や有用海藻を研究対象にしている方にとって重要な論文集であることに変わりはない。今回は1999年にメキシコで行う予定だそうである。

小亀一弘 (北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻)